かしい仕事になることは歴然としている。しかし、いずれは是非やつておかねばならぬ基礎的な仕事である。

かつて丁傳靖氏の編んだ「宋人軼事彙編」（一九三五年初版）という便利な本がある。歴史家に限らず、今でも廣く愛用されているが、この本の體例は、最終卷を除いては、すべて列傳式に人を中心とした編集である。もしこれを事を中心としたものに改編したら、本書の効用はさらに高いものになるだろう、と私はかねがね思つている（これに關連して再び上述の「隆平集」と「皇朝事實類苑」の目次の扱いかたに言及したいが、やめておく）。そして、こういう整理工作をやる場合に是非缺かせないことの一つは、事がらと人との雙方それぞれについて、二種以上の文獻の記述内容に相互連關がある場合には、項目摘出の過程において必ず cross-reference を考えるということ、そして、後世の隨筆には前人からの轉引（まじぴき）や、時には剽竊さえ珍らしくないから、出來る限りその本を突きとめて指摘しておくことが必要である。

新中國においても、一九五九年以來、「明清筆記叢刊」や「元明史料筆記叢刊」などといつたシリーズが引きつづいて刊行されているし、またそれと並行して、上海の張心逸氏が「歴代文史索引」という厖大なインデックスを編纂中だと聞いている（但し、目次をもたぬ文獻を氏がどう處理されるかについては分からない）。この種の工作の重要性が、かの國の學界でも同じように認識され來つたわけである。どうか佐伯氏を始めとする同志のかたがたが、今後ともこの地みちな仕事を發展させ擴充させて、世界の學者をますます益せられんことを、心から期待したいと思う。

今この一文を自から讀み返してみて、どうも苦言ばかりが多過ぎたような氣がする。といつて、ことさらにアラ探しをしたり、ないものねだりをするつもりは毛頭なかつたのだが、結果としては、甚だぶしつけな評言ばかりが並んでしまつた。なかには釋迦に説法的な部分もあつたかも知れない。しかし他意は全くないのであつて、つい私のいつもの癖が出てしまつただけのこと、ひらに御容赦を願いたい。

（入矢　義高）

中國善書の研究

酒井忠夫著

昭和三十五年八月　弘文堂刊　本文四八五頁　序文四頁　目次四頁　索引七頁　圖版一二

本書の著者酒井氏は、かねてから中國における儒佛道三教の關係、あるいはその基盤となる社會が、相互の相關關係によつて如何なる現象を示したかということに關する研究に、たゆまぬ努力をつづけてこられた人である。今回本書の刊行がなつて、これを手にとつて拜見した時、今までの多くの研究成果が、まことにみごとな體系の下に、綜合化されたことを如實に知つて、今更ながら著者の眞摯な研究に頭のさがる思いがする。

ところで本書の題名にある「善書」とは何であるか。一般には、しばしば「善本」の意味にとられるそうである。それほど善書という言葉が案外に一般の人々には知られていない。それは一つに「善書」と銘うつて解説した書物が、今までに殆んどなかつたからであ

る。およそ善書とは、本書の中で著者ものべているように、簡單にいえば「勸善の書」という意味で、宋代以後に一般に用いられた。しかしそれはただ單に儒教經典の中で說く道德の實踐を勸めるばかりでなく、民衆にも受けいれられやすい通俗的な要素をもっている。つまり勸善懲惡のために民衆道德及びそれに關連する事例、說話をといた民間流通の通俗書のことである。したがつて儒教經典や佛教道教の經典ともことなり、儒佛道三教共通の要素を含み、混合した民間信仰をもあわせて、民衆一般に行なわれる道德をすすめ、貴賤貧富をとわず行なわれたものである。このような善書の代表的なものとして太上感應篇、陰隲文、覺世經および功過格などが擧げられるが、著者はこれが最も流通したのは、明末淸初を頂點として、明淸時代を極盛期とするといわれ、本書ではとくにそのうちでも明代に焦點をあわせ、明代の國家社會と善書との關係、とくに善書が成立するための背景となつた明代の社會とは如何なるものかについて、熱心に檢討しておられる。その點では「明代社會と善書の研究」といい換えてもいいであろう。今までに陰隲文の研究とか、太上感應篇について、個々の研究はなされたが、それが綜合的にその時代の社會との關連において、考究したものはなかつた。したがつて吉岡義豐氏が東方宗教一六號の中で、「本書を得て、はじめて善書という市井の雜本、俗書が、中國學研究において、貴重な資料であることが立證せられた」といわれたのももつともである。

本書はすべて七章から成つている。しかしこれを大別すると、その第一章および第二章は、善書が成立する基盤である明代社會を解明せんとしたものであり、第四、五、六、七章は、善書作成の代表的人物である袁了凡や代表的善書である功過格、陰隲文、および明末の寶卷など、いわば善書の內容を具體的に說明したものである。この兩部分を結びつけるのが第三章「明代における三教合一思想と善書」であつて、善書のもつ思想的背景として明代の三教思想がどのように影響したかを論じている。とくにこの章は、他の諸章がすでに發表された論文を基盤としたのに對し、新しく著者が書きおろされたものである。

さて第一章「明朝の教化策とその影響」においては、まず明代に教化勸戒のためにつくられた勅撰書を列擧し、それぞれについて解說を施こし、刊本の所在についても言及しておられる。ついでそれが明代のどの時代に出來たかということについて、洪武、永樂、宣德から崇禎に至る各時代每に分け詳細に說明され、その大部分が洪武、永樂になつたという。まことにこの解說は便利であり、後學を裨益する所多大である。しかし洪武、永樂時代にはこれらの書が多く作成されたことはこれによつて知りえても、それをもつて他を推すことは危險であり、永樂年間に作成された高皇后傳が嘉靖に再刊され、永樂七年の聖學心法の重刊本がわが內閣文庫にあり、嘉靖三十八年の刊行になつている外、その他の書においてもしばしば重刊、覆刊が見られるので、その製作年代とともに、どのようにしてそれぞれが實際に行なわれたかを檢討する必要があろう。著者はつぎに民間教化という面から、五十有餘の勅撰書の中より御製大誥と教民榜文をとりあげ、さらに榜文中のいわゆる聖諭六言「孝順父母、尊敬長上、和睦鄉里、教訓子孫、各安生理、毋作非爲」が、明末に至つて六諭に發展し、鄉約の中で捧讀されたことを論じ、その

時期を嘉靖八年の題准が機縁をなしたものといい、それ以前の呂氏郷約中心より、六諭重視の傾向に移つていつたことを明らかにされている。ただ欲をいえばこのような太祖の六言が、何故嘉靖ごろから再びやかましく提唱されねばならなかつたのであろうか、その意義をより詳細にのべていただきたかつた。

さてこの六諭は、里甲や郷約で用いられるだけでなく、ついには家訓の中にもとり入れられ、宗族、家族の規範となつたことは羅洪先の「秀川族約序」や、何士晉の「宗規」にも明らかであるが、その傾向がまず現れたのは嘉靖時代であるという點は注目すべきことである。しかも王氏の「宗講約」のごとく明末の宗約には六諭が孝順事實・太上感應篇とならんで擧げられており、萬曆になると六諭の註解書の中には善書の說く所とあまり異ならぬものが出て、ついに明末の善書である勸戒全書のように「聖諭六言解」がその中に收められて一部をなすようにまで至つている。かくて明末になると郷約、社倉、社學、保甲などを一體とする組織を通じて、六言をはじめとして勅撰書などによる敎化の施策が、自然的村落社會の結合を土臺として民間の宗敎的結合紐帶の一つである社・土穀神の民間信仰に支えられて廣く行なわれたことを明らかにされている。また最後にその敎化策の推進者として郷紳・士人の役割に言及されているが、これは次章において具體的にのべられているものである。こうしてみると、この章では明朝の敎化策が及ぼした影響について、それが善書とどんな點でむすびつくものであるかに關して、六諭や爲善陰隲などの勸戒書が民間の善書作成に影響を及ぼしたこと、また民間敎化に民間信仰が利用されそこに善書が介在する餘地があつたことなどを知るのである。すなわちここでのべられたことは、勸戒書と地方敎化との具體的な關係及び郷約と六言の結びつきについて論じられたものであつた。ついでながらいささか氣になつたことはたとえば三一頁をみると「圖說の體載」と書いた次行に「體裁」の語があり、さらに「體載」・「體裁」が一行ごとに用いられているが、これは校正上のことながらいかにも體裁の惡いものである。また三五・六頁に大誥續編の明孝第七を引用されているが、その末行近くで、「豈有但供膳而已」・「備明於首註、于是從吾命者」とある所は、玄覽堂叢書「昭代王章」によれば、「豈有但供飲膳而已」・「備明于首、註于足、從吾命者」であり、念のため北京京師圖書館にあつた大誥續編をみても、やはり「昭代王章」のごとくなつている。したがつてこれは後者に訂正された方がいいと思う。

第二章「明末の社會と善書」においては、まず郷紳と士人の意義を規定し、郷紳・郷宮・縉紳と、士子、士人、衿士との間に身分的差異があり、郷紳は士大夫・官僚となつたもの、士子・士人は郷紳身分となり得ない擧人以下の讀書人各階層を指すと分け、さらに明末では、地方の社會階層を示すときに、郷紳、擧、貢、監、生員、民と列擧することをあげて、それが科擧制度から來た身分差であると說明される。しかもその郷紳と士人の差は、また社會的勢力の差でもあり、とくに郷紳は地方の實力者として、政治上・社會上の問題の中心に立つていたので、とくにこの郷紳をとりあげて種々なる點からその役割を考究された。その上で郷紳の規範を善書の中ではいかに示しているかという例として「居官功過格」をあげ、また「不費錢功德例」によつて、郷紳に對して明末の社會では如何なる

理想像を描いていたかを提示された。ついで宦官の横暴に對する反稅監・反礦監及び燒造・織造などの民變において、鄉紳・士人層が如何なる動向を示したかを敍述し、とくに士人の主導的役割を强調されている。ところでこのような士人は、また民間における利用濟民の社會活動を行なつたもので、これらの善事を編集して、民衆に對する勸善書を作ることが、士人の道德とされた。またかかる士人の社會的地位及び役割について、鄉紳と對應して「不費錢功德例」などの善書の中にもしばしば示されていることを本章では具體例をあげつつ說明されたのである。ここでなお希望することは民變などにおいて積極的に活動した士人たちが善書の製作者とすれば、かれらがこのような善書をどのような形で生かしていたのか、すなわち製作の意圖とその運用についても個々の具體例によつてどのようにして製作され、それが實際にどのような形で流布したかを、比較檢討してみる必要があるのではないかと考えるのである。

第三章「明代における三敎合一思想と善書」は、筆者にとつて最も興味のひく所であつた。著者は明代の三敎合一思想は、すべて太祖の三敎に對する見解にもとづくと考えている。明代の儒家の內もつとも三敎兼修の立場をとるものとして泰州學派をあげ、管志道などには、太祖の三敎論が基準になつていることを論じ、楊復所、李卓吾、趙大洲、羅汝芳らの三敎思想をあげ、隆慶時代にはついに科擧の中にも佛道の思想が流入したことをのべている。さらに泰州學派と善書との關係の深いことを管志道、楊起元、李卓吾などをあげて論じ、ついで林兆恩の三敎思想にも說き及んでおられる。林兆恩については筆者の舊作をひき合いに出されて、誠に恥しい次第であるが、筆者も近くこれを補足する考えでいるので、ここでは詳細に論ずることを避けたいと思う。ただ林兆恩の著作についてみると、嘉靖四十二年自序の三敎會編は、實は四十一年六月より着手して十月に脫藁したものであり、その後倭寇によつて城が陷ちたので、弟兆誥が左手にこれを束ね、右手に母を扶けて脫出し、ようやく原稿の安全を得て上梓したという。また著者が嘉靖四十二・三年以前につくられたものと推定されている「六美條答」は嘉靖三十五年に著作されたものであることを付記しておきたい。その外一つだけ欲をいえば、明代の三敎合一思想を論じる場合、明初の三敎をのべたのち、直ちに泰州學派にと說明を飛躍しておられるが、永樂から嘉靖時代までの三敎思想の動向も看過すべきでなく、この間の發展經過もあわせて考述されると有難かつた。

第四章「袁了凡の思想と善書」においては、まず袁黃の傳と著書をあげておられるが、かれが朝鮮の役に參畫し、出兵の不可をといて容れられず、ついに加藤淸正と戰つたことなど甚だ興味の深い話である。かれの學問思想は經史をはじめ醫、地理、曆數など各方面にわたつているが、かれの著書を通してもわかるように、擧業のために行なつた學問の外に儒佛道の別を論じず三敎一致の形をもつた善書的思想の持主であつたことがわかる。とくにかれの特質は、その思想を功過格の力行を通して實踐したこと、さらにその實踐の結果、命數を超えて子を設け、進士に及第したことによつて、善書の意義を自己の體驗の上に具體的に明示したことにある。袁了凡といえば功過格といわれるが、本章においてはその功過格そのものの研究でなく、當時の社會との關係における袁了凡を描き出している點は著

者の得意とする所を遺憾なく發揮したものといえよう。

第五章「功過格の研究」は前章の袁了凡の功過格をはじめ、明末清初の諸種の功過格を集大成して、その書誌學的研究を行なつておられる。およそ功過格とは一般に善書の中で中國の民族道德を善(功)と惡(過)とに分けて具體的に分類し、その善惡の行爲を數量的に計算記述した書をよんでいる。もともと人間の行爲について功過の判定をくだすことは古くから行なわれ、佛教や道教の教說を中心に民衆の間にもひろまつたが、これがまとまつた形をなしたのは、道藏本功過格であり、さらに袁了凡の功過格、袾宏の自知錄、廸吉錄收功過格、日乾初撰などに發展し、清初にはついに彙編功過格・彙纂功過格などとして集成されたその過程をここで示された。この中には劉宗周の人譜や、劉麟長の聖功格のごとく、儒教道德を整理したもので善書功過格の形式や內容と近く、同類にあつかわれるものも含まれており、これといわゆる善書との相關關係、とくにその時代的發展は注意すべきことであろう。

第六章「陰隲文について」は明末清初の多くの善書の中で、太上感應篇や覺世經とともに行なわれた陰隲文をとりあげたものである。現在に見られる陰隲文はほとんど清代のものであるとして、その主要な刊本を列擧している。ところがその刊本を仔細に檢討すると、原文なるものと增補の部分とに分けることができる。すなわち陰隲文とは文昌帝君信仰にもとづいたものというが、その原文もしくは闕文は、萬曆の時に胡文煥の百家名書第一〇四册に收められた文昌化書の「勸行陰隲文」に近いものということができる。かくて著者はさらにその原文陰隲文がすでに明末に行なわれていた證左として、二顧先生語錄に見ゆる「完眞妙諦、梓童帝君陰隲文」をとりあげて詳しく論じ、宋元時代以後大いに流行した文昌帝君信仰が明末には陰隲文という善書を形成するまでに至つたことをのべられたものである。これは甚だ卓見であつて、本書によつて陰隲文の研究が一歩前進したということができるであろう。

第七章「明末における寶卷と無爲教」と題して、明末におこつた宗教結社とその寶卷との關係を論じ、とくに無爲教について詳說されている。著者によれば「寶卷はそれが世に行なわれる歷史的社會的意義及び民衆に對する宣教勸戒を內容とすることなどから、善書と共通の意義をもち、寶卷も善書の一種であるということができる」と解釋している。これはいささか云いすぎではないかと思われる。吉岡義豐氏が本書の紹介の中で、「寶卷は細かく言うと、その性質上善書的なものと、必らずしもそうでないものとの兩種になろう」といわれた線が妥當ではなかろうか。とくに寶卷の社會的意義からみれば、なおさら善書的でない面も多いのである。著者は本章でまず明末までの主要な寶卷をあげ、ついで明末になつて非常に多くなつた寶卷の種類を示している。さらに萬曆以後の宗教結社について寶卷との關係をもとめ、とくに羅祖の五部六册を中心とする無爲教について、羅清の人物および無爲教の性格を論じておられる。

以上七章にわたつて論述されている要旨をここに略述した。ただ筆者のつたなき筆によつて十分にその眞價を傳えることができなかつた點が多々あるだろうことを恐れる。なかでも著者が苦心して詳述された精緻なる考證の一端をも紹介し得なかつたことは殘念である。まことに本書のどの頁を開いても博引傍證おくあたわざる樣

で、その精細な學識に敬服の念を新たにするのである。しかしまた他方では、なお幾つかの問題もないわけではない。序文の中では、本書が道教研究の一端として、善書に關する思想史的社會史的研究をすすめたものと紹介されているが、善書はただに道教的範疇に屬するばかりではなく、儒教的要素、佛教的要素も多分に持つている。三教思想という場合、この三者を明確に區別するには、いささか困難な時も多々あるが、善書の研究の順序としては、まずその三者の分析を行ない、その上で融合の實態を明示する必要があるのではないか。ともあれ本書では問題が明代に限定されたため、かなり省略された點もあるようで、今後清代を中心とした續編の中にそれらの多くが解明されるであろう。一日も早くそれが續刊されることを期待するものである。

（間野　潛龍）

Chow Tse-tsung（周策縱）, The May Fourth Movement—Intellectual Revolution in Modern China—, Harvard East Asian Studies VI, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1960, 486p.

《今から思うと五四運動に誇りと驚きとを感ずる》とのべる著者は、毛澤東が十五年前に卒業した長沙の高等學校に在學したこともあり、そのころ、《五月四日、我々はあなたに失望しない》という白話詩をつくつて、郭沫若、田漢の編集する新聞に發表したこともあるというほどだから、五四運動の老兵といつていい。どういう事情で現在アメリカにいるのか、明らかでないが、著者が中國共產黨治下の人民中國にあまり好感をもつていないことは、《可能なかぎり多くの事實的記錄の紹介》とされる本書の行間からも、容易に讀みとることができる。

本書は第一部、運動の發展、第二部、主要なる思潮の分析、の二つの部分から成り、序論（一五ページ）と關係事件年表（六ページ）附錄（一〇ページ）註（六五ページ）索引（二九ページ）が頭尾に附されている。章の構成は次の通り。

1、序論。
2、運動を促進した諸力。
3、運動の最初の局面、早期の文學的思想的活動、一九一七—一九。
4、五四事件。
5、事件後の發展、學生のデモとスト。
6、一層の發展、商人、企業家、勞働者からの支持。
7、新文化運動の擴大、一九一九—二〇。
8、運動に對する諸國の態度。
9、思想的政治的分裂。
10、社會的政治的結果。（以上第一部）
11、文學革命。
12、新思想と、傳統の再評價。
13、新思想と後期の論爭。
14、結論、種々の說明と評價。（以上第二部）

ここに見られるように、本書は五四運動の全般的な叙述であり、元來アメリカの讀者を對象としたものであろうから、我々にとつてすでに常識化している問題でも、多くの行をついやして說明されて